

第一問

(六)	知	識	活	傾	知	(五)	(四)	(三)	(二)	(一)
a	性	他	を	動	け	性	(五) 思いもようぬ発想を人々にもたらし、人と理想の活発な知的活動を創出す力。 (四) 集団内でのやりとりを通じた合意形成に至る過程で、個人だけでは を生成してよくという人間の生のあり方が否定されるのと同じだということ。 (三) 自分の思考が相手に無視されることは、他者と応答し合いつながら知 自説を根拠づける豊富な知識を盾にして他人に一方的に語る人は、 自らの思考枠がすべてに妥当する絶対性を備えていると思いつくこと。 自らの思考が相手に無視されることは、他者と応答し合いつながら知 を生成してよくという人間の生のあり方が否定されるのと同じだということ。 (四) 集団内でのやりとりを通じた合意形成に至る過程で、個人だけでは 思いもようぬ発想を人々にもたらし、人と理想の活発な知的活動を創出す力。	(三) 自分の思考が相手に無視されることは、他者と応答し合いつながら知 を生成してよくという人間の生のあり方が否定されるのと同じだということ。 (二) 自説を根拠づける豊富な知識を盾にして他人に一方的に語る人は、 自らの思考枠がすべてに妥当する絶対性を備えていると思いつくこと。 (一) 他人の話をわかったつもりにならず、それに耳を傾け、その内容を実感と と納得できたか否かを、自らの知の枠組みが揺らぐままに内省できる人	(二) 自説を根拠づける豊富な知識を盾にして他人に一方的に語る人は、 自らの思考枠がすべてに妥当する絶対性を備えていると思いつくこと。 (一) 他人の話をわかったつもりにならず、それに耳を傾け、その内容を実感と と納得できたか否かを、自らの知の枠組みが揺らぐままに内省できる人	
陳	的	の	を	、	と					
腐	で	人	示	活	自					
b	あ	々	し	性	ら					
怠	つ	の	、	化	の					
惰	た	知	独	す	思					
c	た	的	断	る	考					
頻	め	創	的	者	枠					
敏	し	造	な	の	を					
系	は	カ	考	で	刷					
	な	を	え	あ	新					
	い	失	を	る	し					
	、	わ	主	以	つ					
	と	せ	張	上	つ					
	ソ	る	す	、	集					
	う	人	る	自	団					
	こ	物	だ	己	の					
	と	が	け	の	知					
	。	、	て	知	的					
					を					

第二問

(三)	(二)	(一)	
<p>尼上<small>カ</small>が火葬に付され、後に残された姫君は今こそ悲しむべし、と。</p>	<p>自分の死後も必ず乳母に姫君を大切に世話してもらいたいということ。</p>	<p>オ 目をとめることさえなさらないので</p>	<p>イ 悲しいというのも、月並みな言い方だ ウ すぐにお迎えしよう</p>

第三問

(三)	(二)	(一)	
<p>てとり、作者が共感を覚えたから。</p> <p>遠方から運ばれた海棠に、黄州に左遷されたわが身の孤独を見</p>	<p>海棠の紅色の花を、酒を飲んで頬が赤くなった美女にたどえている。</p>	<p>d 私は海棠の花にさわることをさえたためらわけてしまっただろう。</p>	<p>b 何もすることがない。</p>